

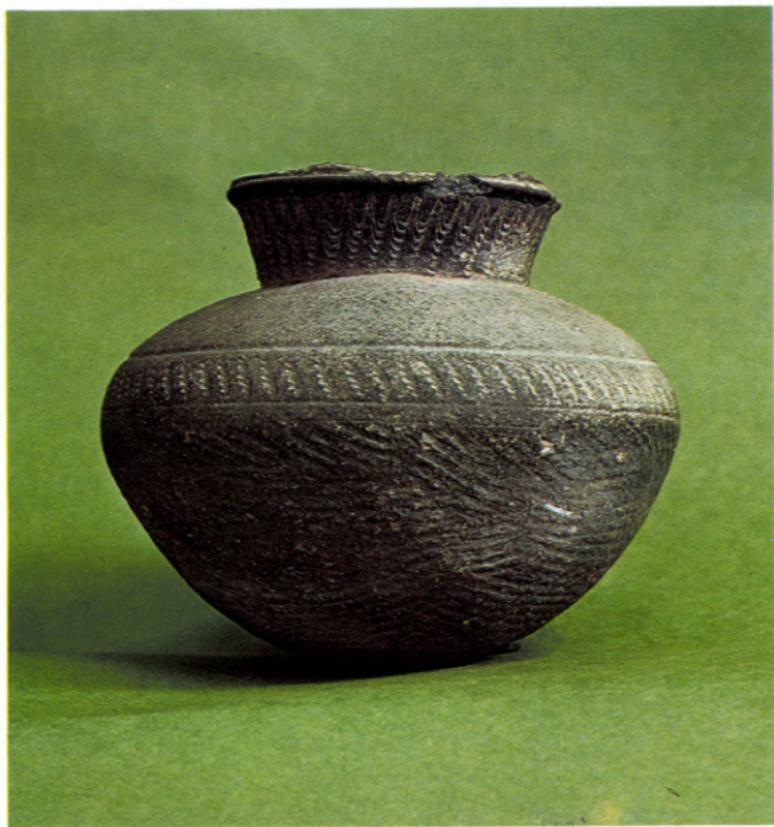
矢吹町史

第2卷

資料編I



縄文式土器 (後期) 一柏山遺跡一 町教育委員会蔵
町245 全30,418



須 恵 器 高12.5cm 一松 倉一 大場昭雄氏藏



かに沢瓦窯址
—かに沢遺跡—
町228 全38,106

「寺」のへら書きのある布目瓦
—かに沢遺跡— 町教育委員会蔵





矢吹袖ヶ城跡



矢吹袖ヶ城遠景

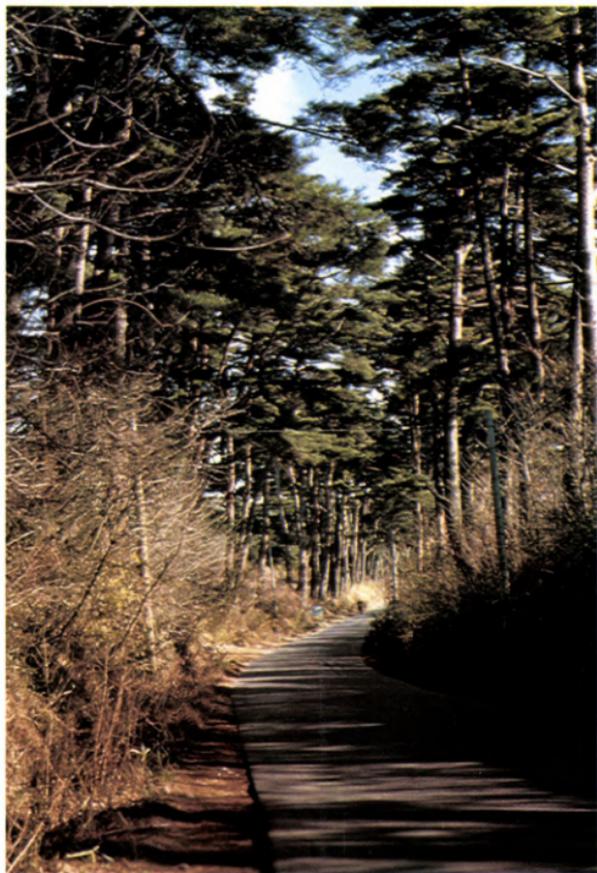


国神館跡 一町指定史跡(昭和48.3)－



中畑村絵図 (部分, 国神館跡を示す) 岡崎長成氏蔵

五本松の松並木
—町指定史跡—

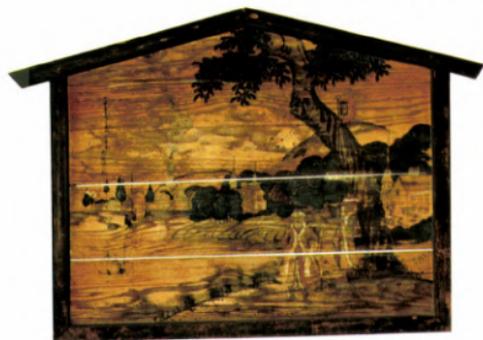


街道常夜燈 文化6



中畑根宿観音堂絵馬
40×60 寛政7

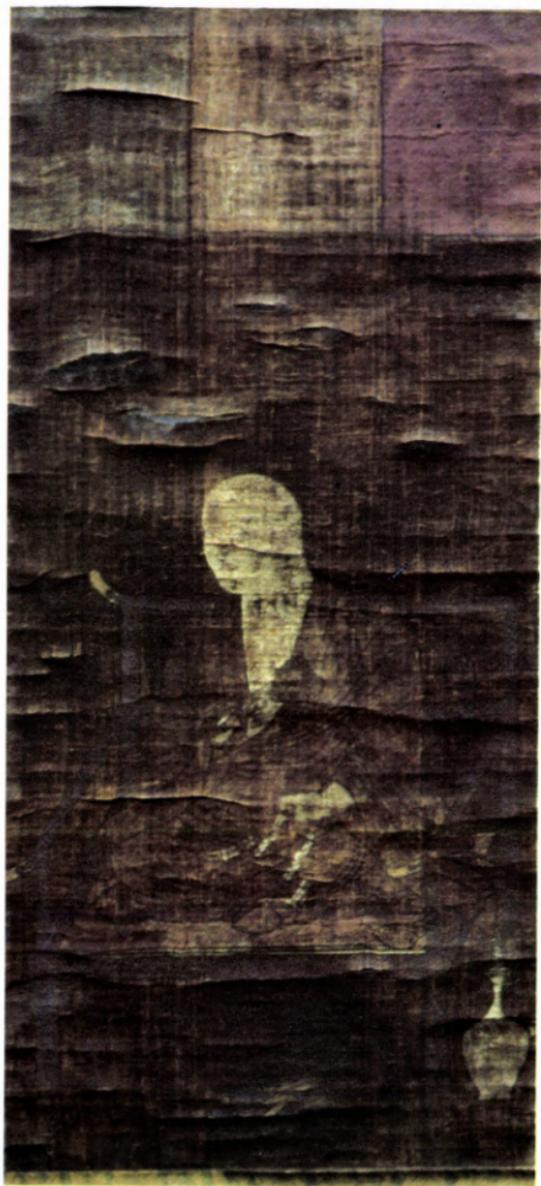
中畑根津権現社絵馬
52×112 嘉永4



明新観音堂絵馬
60×80 嘉永5

中畑根津権現社絵馬
60×80 天保年中



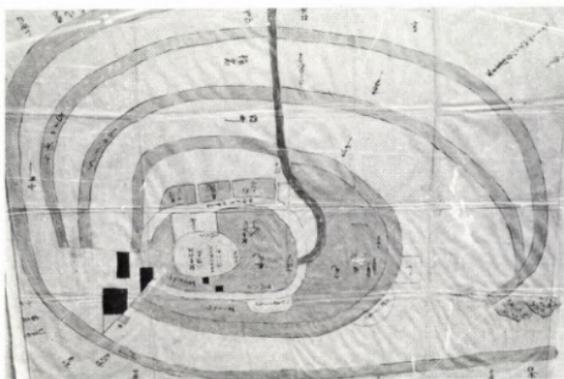


中畑根宿来迎院弘法大師像 根宿区有

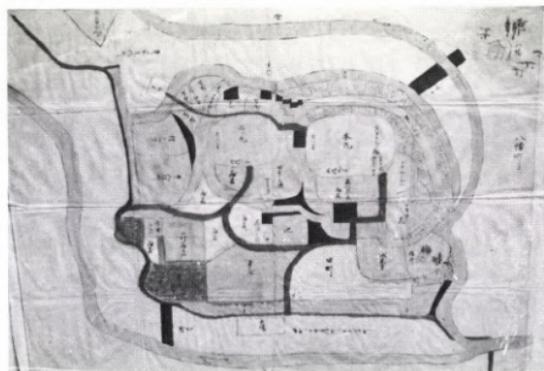
中畑観音山館跡
遠景 中畑根宿



観音山館絵図面
須賀川 相楽定邦氏蔵



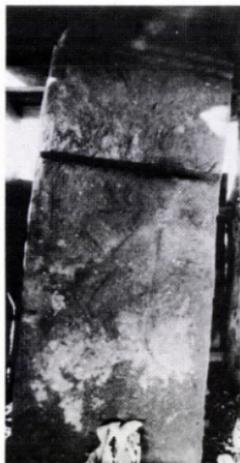
タカナシ館跡遠景
三城目



タカナシ館絵図面
須賀川 相楽定邦氏蔵



伝中島晴辰の墓
三城目根岸地内



大畑地藏尊供養塔
高140 元享2



明新供養塔 A
高150 弘長4



景政寺供養塔 C 高90 喜禎2
「集古十種」による模刻



三城目川原供養塔 高100 年記不明

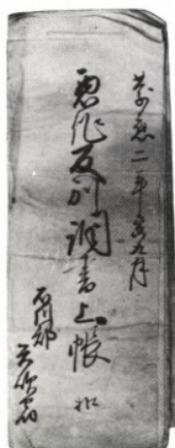


中野目塚原供養塔 I
高136 嘉元3

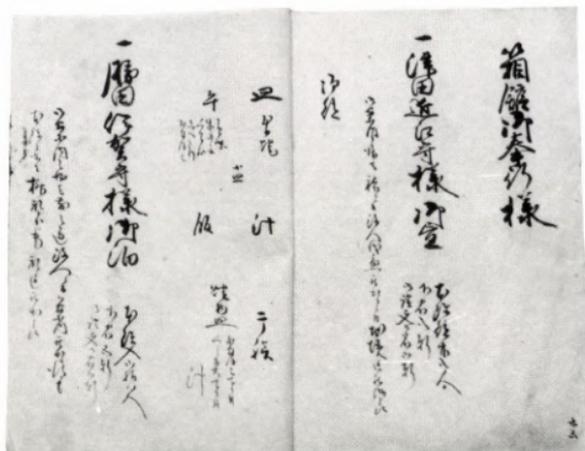


寛政3 質奉公人一件書

岡崎長成氏蔵

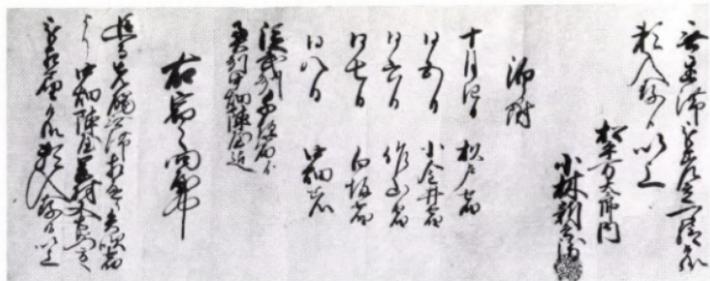


慶応2 悪作反別調書上帳
会田宗太郎氏蔵



諸家様并御部屋様方
同御家中様御休泊記録

佐久間光男氏蔵



天保年中助郷仰附

小針弥太郎氏蔵

発刊のことば

矢吹町長 仲 西 藤 次

さきに、町村合併二十周年、町制施行七十五周年を記念して、「目で見る矢吹町史」を発行いたしましたところ幸いにも各界の御好評をいただきましたが、続いてかねて予定の通り、全三巻の町史を発行することになり今回資料編Ⅰができあがりました。私達の町矢吹は、長い伝統と豊かな人情・風俗を保つ「さわやかな田園の町」をめざし、年々人口も増加しつつある発展途上の町であります。これは、私達の先人がたゆまぬ努力と創意によって拓き、築きあげてきた歴史と遺産のたまものと考えます。矢吹は「昔、八幡太郎義家が奥州入りの時、弓の矢柄で神社の屋根を葺いたということから、屋根↓矢吹の地名が起った」と語られ子供心に聞いていました。近時開発整備などで阿武隈川・泉川・隈戸川の沿岸を中心として数多くの遺跡が明らかにされ、さらに未確認の埋蔵文化財も予想されることは、この地が原東北人の生活を証しさらには中央政府との政治・文化の交流を示すものであります。中世の行方野（一部矢吹ヶ原）における武士団の抗争、近世にあつては、奥州道、茨城道筋の宿場としてその役割を果たしてきました。明治以後の近代への波は矢吹の地にも例外ではなく訪れ、地域を大きく変容させ、さらに大東亜戦争と民主国日本の再生は、生活を一変させました。このような時の流れの中で、住みよい町づくりは、いつもその時代の人々の重要な念願であり課題であつたと考えます。「古きをたずねて新しきを知る」と古人は教えています。単なる懐古ではなく将来へのよき指向として歴史のもつ重みがここにあると考えます。どうぞこの町史を各家庭に備えられ、先人の偉業を子々孫に残す文化遺産として愛蔵されんことをお願い致します。

昭和五十二年九月

目次

口 絵

発刊のことば

町長 仲西藤次

凡 例

第一編 原始・古代 — 考古資料 —

1	原始・古代考古年表	5
2	矢吹町遺跡地名表	8
3	矢吹町遺跡所在図	14
4	旧石器	20
5	縄文	22
6	弥生	26
7	古墳	28
	解説	74
	第二編 古代 — 記録資料 —	77
	解説	87

第三編 中 世	89
---------	----

1 文書資料	91
2 館・城跡所在表	135
3 板碑供養塔所在表	136
4 館・城・板碑所在図	142
5 金石文(石造供養塔婆)	148
解説	154

第四編 近 世	155
---------	-----

1 領主・代官	157
2 法度・布令	180
3 藩政・幕政	218
4 戊辰戦争	236
5 村の生活	243
(一) 土地	(243)
(二) 人口	(439)
(三) 年貢諸負担	(465)
(四) 村と生活	(701)
6 産 業	859
(一) 農 業	(859)
(二) 製 造	(933)
(三) 商業・金融	(939)
7 一揆・訴願	963
解説	1067

所載資料目録	1079
資料提供および協力者	1107
矢吹町史編纂関係者	1108
あとがき	

矢吹町史編纂委員長 小林重孝
矢吹町教育委員会教育長 仲西藤次

題字／矢吹町長 仲西藤次

装幀／宗像喜代次

凡 例

一、この巻は「矢吹町史」第二巻 資料編Ⅰで矢吹町における旧石器時代から戊辰戦争前後までの史資料の主なものを集成した。第一編原始・古代―考古資料―、第二編古代―記録資料―、第三編中世および第四編近世で構成されている。

二、第一編原始・古代―考古資料―は旧石器時代から奈良時代の考古資料の写真を主とし、必要なものは拓本・実測図を付した。

(1) 内容は、遺跡単位ごとにまとめ、時代別配列を根幹とし、視覚的に示すことを目的として簡単な解説を付した。

(2) 考古年表・矢吹町遺跡地名表・所在図を掲げ、昭和五十一年度末までに知り得るものを紹介し、次に旧石器・縄文・弥生・古墳と大別して区分しその主なものをとりあげた。

(3) 遺跡名の表示は、矢吹町遺跡地名表によって表示した。番号は次の通りである。

町―矢吹町遺跡地名表番号

全―文化庁発行(昭49)埋蔵文化財包蔵地所在地名一覧の番号

三、第二編古代―記録資料―は大化前代から平泉藤原氏滅亡までを対象としたが、矢吹町に直接関係するか、あるいは矢吹町を含む地域に関係するものを収録した。

(1) 内容は年代順に配列し、資料番号と収録書名を掲げ、関係部分を抄出した。

(2) 読点・返り点および送りかな、必要によってはルビを付し読み易さをはかり一点ごとに解説を付した。

四、第三編中世は、鎌倉時代から豊臣秀吉の「奥羽仕置」までを対象としたが、その後の関連史資料も加えた。

(1) 内容は、文書史料、館・城所在表、板碑供養塔所在表、および所在図、板碑文をもって構成されている。

(2) 文書史料は、年代順に配列し、資料番号・標題・収録家別文書名・所蔵者名などを付し、矢吹町とその関係する地域での事件、人物の動向に関係するものを収録した。

(3) 読点および返り点を付し、一点ごとに解説を加えた。

(4) 城・館所在表は、遺構の確認がなされているものと、地元で伝えられているものなどを掲げた。

(5) 板碑供養塔所在表は、昭和五十一年度末までに発見されたものを掲げた。

(6) 板碑文は、年記銘のあるものについてのみ掲げた。

五、第四編近世は、天正十八年（一五八九）から戊辰戦争前後までを対象とし、町内各家所蔵文書を主とし十の大項目に分類し内容によっては小項目を設けた。

(1) 各項目ごとに年代順に配列し、資料番号、標題を付し、標題は「」の中に編者が内容に応じて記した。文書に標題のあるものは次にそれを記し、表紙のあるものは次のように記した。

一表紙

「
」

(2) 変遷表・年譜・人口・石高などは原資料をもとにして編者が一覧表にまとめたものもある。

(3) 各資料の末尾に所蔵者の住所・氏名を「」の中に記し、抄出部分についてはその旨を付した。

(4) 解説は必要に応じて付するようにつとめたが同類のものについてはまとめた。

六、文書資料の収録については、次の点に留意しつとめて原資料にそうようにした。

(1) 長い文章については、原資料の行にこだわらず続けて記した。

(2) 人名・地名など長く一段の場合は紙面の都合上二段、あるいは三段とし上段から下段の順序で記した。

(3) 異字・異体は原則として正字に改め当用漢字のあるものはそれを使用した。

(4) 変体がなはひらがなに改めたが、助詞に使用されている而(て)・江(え・へ)・茂(も)・者(は)などは小字で記した。ち(より)・并(ならび)はそのまま使用し、かたかな・ひらがなの別は原資料通りとした。

(5) 明らかに誤りと思われるものは改めたが、やや疑問の残るものは右側に(カ)を付し、改めにくいものは右側に(ママ)と記した。

(6) 欠損箇所は、□あるいは「」をもって示し、原資料の一部を欠くものについては、前欠・後欠・欠と記し、又省略した部分は(略)とした。

(7) その他、原資料になく編者が記したものは、() () を付した。

七、本巻発行にあたり、資料所蔵者及び資料調査協力者の方々に深く謝意を表するものである。